



現場の話 ③

教育振興運動 50 年

◆ 50 周年記念 県大会は、1/16 (金) マリオス



所長 佐藤 公一

昭和 40 年 (1965) 4 月、県教委が、子ども・家庭・学校・地域・教育行政が一体となって岩手の教育を高めようとの趣旨で提唱した教育振興運動は、今年 50 周年を迎えました。呼びかけを受けた県内 63 市町村のうち 40 の市町村では、その年の秋には組織的な推進活動を開始させ、さらにその約半数の市町村においては実践活動の展開が早くもスタートしたといえます。正に「教振半世紀」。即応した各市町村の機敏な行動力と、時代の変遷を経ながらもそれが今日まで継続されてきていることに、驚きさえ感じます。

◇ 50 年前の本県の教育の状況

一体何がそこまで県民を突き動かしてきたのでしょうか。今の私たちが伝え聞くのは、「当時、岩手の子どもの学力は、全国最下位グループだった。これではいけないという危機感で県民が立ち上がり、一丸となって取り組んだのが教育振興運動だった」ということです。

では、当時の資料から、その背景を少し辿ってみましょう。学力は、今も昔もペーパーテストだけで測ることはできないにせよ、当時の教育水準や教育条件の状況を理解するために、関連する数値を以下に挙げます。

『教育振興運動 5 年の歩み』岩手県教委 1969 から引用

◇ 昭和 37 年度 (1962) の状況

(1) 就学前教育率 (就学前に幼稚園を修了した割合)

岩手県	全国	全国との格差
14.3%	33.0%	△18.5

(2) 小中学校の長期欠席者率

	岩手県	全国	格差
小学校	0.74%	0.52%	△0.22
中学校	1.79%	1.00%	△0.79

(3) 高校・大学進学率

	岩手県	全国	格差
高校進学率	49.7%	64.0%	△14.3
大学進学率	13.7%	17.9%	△ 4.2

(4) ペーパーテストによる学力測定 (全国学力調査)

	国語	算数※	社会	理科	英語
小 6	86.6	76.0	/	/	/
中 3	85.8	76.6	87.4	84.2	76.8

\* 全国平均を 100 とした場合の本県の正答率 (%) ※中学校は、数学

(5) 1 校当たりの平均図書保有数

	岩手県	全国	格差
小学校	764 冊 (55%)	1,387 冊	△623 冊
中学校	1,216 冊 (60%)	2,018 冊	△802 冊
高校	2,777 冊 (55%)	5,092 冊	△2,315 冊

\* ( ) は、全国平均に対する割合

◇ 実状をどうとらえて取り組んだか

「… 岩手の教育水準が全国に比し低位にあることは、単に教育機会均等の精神にももとり (反し)、岩手の子どものために誠不幸なことといわざるをえない …」

これは、昭和 39 年 (1964)、本県で初めて策定された「教育基本計画 (教育振興基本計画)」の冒頭で、教育振興運動の生みの親である当時の県教育長 (後に盛岡市長、衆議院議員、文部省政務次官、岩手県知事等を歴任) 工藤 巖氏が述べておられる一節です。

教育の成果を左右するのは、単に子ども自身の能力や努力、学校の教育力だけなのではなく、その基盤たる生活水準や文化水準、それを支える所得水準、さらには本県の産業構造や就業構造、財政水準までが深く関連することから、それらを一括りにして考え取り組んでいかななくては解決しえない課題なのだ、という姿勢は、既にこのときから自覚されていました。

この教育基本計画は、優に 500 頁を超える大冊で、その分析・検証対象の広さや深さには圧倒されますし、内外か

ら高い評価を受けたこともうなずけます。

教育振興運動は、それだけが単独で進められてきたのではなく、県総合開発計画（現在の県民計画）に即応し、産業構造の変化と県民所得の増加を前提としながら、県民側の自主的・自発的活動として取り組まれてきたのです。

### ◇ 誇りに思うこと



昨年度、文科省は、全国学力学習状況調査の実施に際し、保護者を対象とした調査も行い、次の点を指摘しました。

家庭の社会的背景（SES：家庭の所得と父母の学歴）が高い児童生徒の方が、各教科の平均正答率が高い傾向が見られる。

私は思わずつぶやきます。「そんなこと、岩手では50年前から気付いて、県民を挙げて取り組んできてるべ …」

運動開始当初、「子どもに机や勉強部屋（スペース）を」というテーマが各地で取り上げられたことはよく知られている話ですが、ここにその一端を示す成果推移のデータがあります。（\*専用、共有を含む。勉強部屋は間仕切り状況も含む。）

	机の所有率	勉強部屋の所有率
A 町	40年 9月：87%	40年 9月：24%
	41年 3月：98%	41年 3月：74%
	41年 10月：99%	41年 10月：98%
B 町	40年 9月：48%	40年 9月：27%
	41年 10月：78%	41年 10月：43%
	42年 10月：90%	42年 10月：66%

上記の「教育振興運動」のロゴマークがいう誇れるものとは何なのでしょう。私は、物質的に豊かでない中、解決（実現）できそうなことは、地域全体で意識や手だてを共有し、運動として取り組んできたこと。言い換えれば、単なる「ないものねだり」に終わらせず、上記の指摘のような「所得や学歴の壁」を、地道な運動によって補い、克服してきたことこそが、最大の誇りなのだと思います。

また、そもそも教育水準格差については、全国との比較においてのみならず、県内の地域間にも存在しました。市町村内にあっても同様です。私が思う第二の誇りは、都市部、農・漁村部の分け隔てなく、全ての市町村が一丸となって取り組む体制が半世紀にわたって脈々と受け継がれてきたことです。皆が互いに思いあい、心一つにして真摯に取り組む。少なくとも半世紀にわたって取り組んだ教振の成果は、今回の大震災直後とその後の復旧・復興の取組にも、大きな足跡を残しているとはいえないでしょうか。

### ◇ これからの教育振興運動

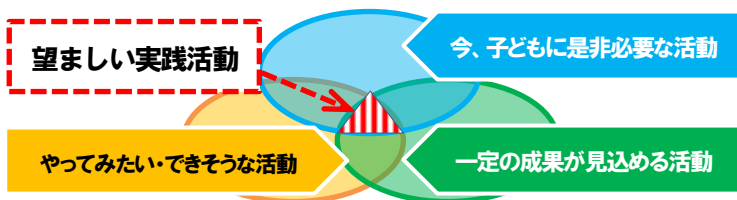
身近な教育課題をとらえ、その解決策や目指すべき目標を掲げ、実現の手だてについて役割分担を明らかにし実践する。その成果を検証し、次の課題へと向かう。それら一連のプロセス自体は何も教振独自のものではなく、物事取組におけるスタンダードな手法です。「教振って何？」との問いに対する答えは、「主人公である子どもだけに努力を求めるのではなく、周りのみんなが責任を自覚し、それぞれの立場で力を合わせ具体的に取り組むこと」だと思います。

51年目から教振が目覚しく変化するわけではありませんが、節目に当たって今後の教振のあり方を考え、各実践区（事務局）において、今一度振り返ってみてほしいと願うことを2点だけ挙げさせていただきます。

#### ① 課題をふまえた活動内容の構成バランスは適切か。

実践区によっては、活動内容が単発イベント的なものに偏っている傾向が見受けられます。確かに単発のものでも多様な体験活動などは意義あるものですし、そこには一定のプロセスがあり成果も期待できるわけですが、それだけでなく、日常的に取り組むような、正に実践を重ねる内容も並行して配置していくことも必要ではないでしょうか。

5者の役割といいながら、活動によって主要な担い手は一樣ではありません。5者相互の負担の具合にも配慮し、望ましい活動（下図）を適切に構成する必要があります。



#### ② 評価・検証の方法が位置付けられているか。

（→ 取組のモチベーションにつながります）

よく目にする反省（評価・検証）に、「〇〇に取り組むことができた」というものがあります。確かに課題解決に対する何らかの取組自体にも意義や意味はあるのですが、それだけでいいのでしょうか。目的・目標の達成状況に至らず、手だてそのものの評価で終わっていないでしょうか。子どもを取り巻く変化や改善状況を共有しないで、果たして次の取組への意欲が湧くのでしょうか。取組主題のうちの一つだけでも、周囲の声を集約して定性的評価をしたり、学校評価等をうまく活用して定量的評価を試みたりするなど、実践の適切な総括をする必要があると思うのです。



# 平成 26 年度 岩手県生涯学習推進研究発表会

期 日 **2月5日(木), 6日(金)**

テーマ **「連携・協働でつくる社会教育」**

ご案内

今年度の岩手県生涯学習推進研究発表会は、平成 27 年 2月5日(木)と6日(金)の二日間にわたり、当センターを会場に開催されます。

【講演】5日(木) 13:20~14:50

「連携・協働で育む地域の力」

～さまざまな主体が集うプラットフォームづくり～

香川大学生涯学習教育研究センター

センター長 清國 祐二

今年度はメインテーマを「連携・協働



でつくる社会教育」としました。それを受けまして5日は、香川大学生涯学習教育研究センターのセンター長清國祐二先生より「連携・協働で育む地域の力～さまざまな主体が集うプラットフォームづくり～」と題してご講演をいただきます。今や生涯学習・社会教育の推進には、行政組織とNPOや私企業、大学等との広い連携・協働が不可欠となっています。地域におけるNPO活動やボランティア活動等の実態をふまえ、行政とNPO等との効果的な連携方法や取組事例にもふれていただきます。

【ポスターセッション】5日(木) 15:00~16:30

講演の後は、NPO法人等6団体をお招きして、ポスターセッションを行います。県内外で震災復興に関連した取組や地域活性化等に取り組んでいる団体のブースを設け、ご説明いただきます。参加者の皆さんには3団体を選んでブースをお回りいただきます。

※ 参加団体

NPO 法人 「遠野まごころネット」「やませデザイン会議」

「くちない」「いわて連携復興センター」

「ふくしま新文化創造委員会」

一般社団法人 「SAVE IWATE」

【研究発表】6日(金) 9:30~12:00

- 「市町村との連携による研修の充実方策に関する研究」
- 「震災復興のためのNPO等との連携に関する調査研究—行政とNPOとの協働の可能性をさぐる—」

6日は、今年度当センターで取り組んだ二つの研究を発表させていただきます。

一つ目は「市町村との連携による研修の充実方策に関する研究」です。アンケート調査等による県内市町村社会教育関係職員の研修状況の把握とともに、当センターと市町村の連携による研修機会の確保と効果的な研修方策について、金ケ崎町の社会教育指導員を対象とした研修をモデルケースとして探ります。

二つ目は「震災復興のためのNPO等との連携に関する調査研究—行政とNPOとの協働の可能性をさぐる—」です。東日本大震災津波からの復興にNPO等がどのような役割を果たしてきたのかを明らかにするとともに、沿岸部で実施した復興支援セミナーの事例をご紹介します。社会教育行政とNPO等との連携・協働のあり方を示します。

岩手大学教育学部学部長の新妻二男先生に進行・助言をお願いし、参加者の皆様との質疑応答の時間も設けますので、積極的にご発言ください。

多くの皆様のご参加をお待ちしております。

※参加申し込みは、「まなびネットいわて」で検索ください

ご活用ください



当センターでは、子育てに悩みや不安を持つ保護者の相談に「すこやか電話相談・メール相談」、生涯学習活動に関する問合せに「マナビィコール」で対応しております。また、生涯学習の推進に役立つ情報は、HP「まなびネットいわて」に掲載しています。ぜひ、ご活用ください。

- ◇すこやか電話相談 0198-27-2134
- ◇メール相談・メールマガジン配信 [kosodatem@pref.iwate.jp](mailto:kosodatem@pref.iwate.jp)
- ◇マナビィコール 0198-27-4563
- ◇まなびネットいわて <http://www2.pref.iwate.jp/~hp1595/>



《昨年度の発表会》

宮古市は、本州最東端に位置し、平成17年に「平成の大合併」により誕生してから間もなく10周年を迎えます。

山・川・海の豊かな自然環境に恵まれ、それらを活かした農業や漁業、観光業などに力を入れています。

生涯学習事業においては、市民が生涯を通じて「いつでも・どこでも・誰でも」学ぶことができる社会を実現するため、生涯学習環境の整備、家庭教育や青少年・成人の学習活動支援、生涯スポーツの振興などに取り組んでいます。

## 宮古サーモン・ハーフ・マラソン

毎年11月に宮古サーモン・ハーフ・マラソン大会を開催しています。本大会は、ハーフマラソン、10km、5km、ペアマラソン（約2km）の計4種目があり、市内はもとより全国各地から集まったランナーが自己記録更新を目指して走ります。また、気軽な生涯スポーツの場や日頃の体力づくりの成果を示す場として子どもからお年寄りまで多くの市民が参加しています。単なる生涯スポーツイベントに留まらず、市民にも市民以外にも広く親しまれる宮古市の一大イベントとなっています。

東日本大震災により従来のハーフマラソンのコースが一部被災し、特徴のひとつであった海沿いのコースは使用できなくなりましたが、現在は新しいコースで開催しています。

今年は11月9日（日）に第28回大会を開催し、参加者は沿道からの応援を受けながら、そして互いに励ましあいながら晩秋の宮古路を駆け抜けました。申込者数は歴代3位の3,293人、完走者数は歴代1位の2,990人、そして1種目で大会新記録が出るなど、例年にも増して盛り上がりました。

また、ゲストランナーとし箱根駅伝の2015年シード権を獲得している青山学院大学陸上競技部の選手団が参加し、そのスピードに観客や参加者は驚いたり刺激を受けたりしていました。



## 宮古市読書ボランティア研修会

「読書まち宮古」推進のための取り組みの一つとして、11月18日（火）から20日（木）までの3日間、山口公民館を会場に読書ボランティア研修会を開催しました。読み聞かせに関する手法等を学ぶことを目的に、小林なるみさん（俳優／ナレーター）を講師に迎え、ボイストレーニング等を行いました。

参加者は、最近読み聞かせに興味を持った方やスキルアップを目指す読書ボランティアなど様々でしたが、絵本と人との出会いを楽しみながら、読み聞かせについてのコツを身につける良い機会となったようです。

読み聞かせ前に緊張したら、大きな声で「ハッハッハ」と笑い、どこでも出来る簡単なストレッチで身体をほぐし、なるべく自然体で行うことなどのアドバイスに、「いつもより声の調子が良い」という笑い声に包まれていました。

参加者は、読み手の思い込みの感情をなるべく入れず、絵本からあふれ出るメッセージを伝えられるようにというテーマを持ちながら、子ども達の豊かな感性を育むために活動していくことに弾みがついた様子でした。

情報提供：宮古市教育委員会生涯学習課

